

鹿島灘ハマグリ浮遊幼生の移動・分散予測

水産土木工学部

研究の背景・目的

鹿島灘ハマグリ(チョウセンハマグリ)は茨城県名産の二枚貝ですが、1991年と1993年の大量発生以降、大規模な発生がみられません。そこでハマグリ幼生が約2週間の浮遊期間にどのように移動・分散するか、流動の数値計算により再現しました。

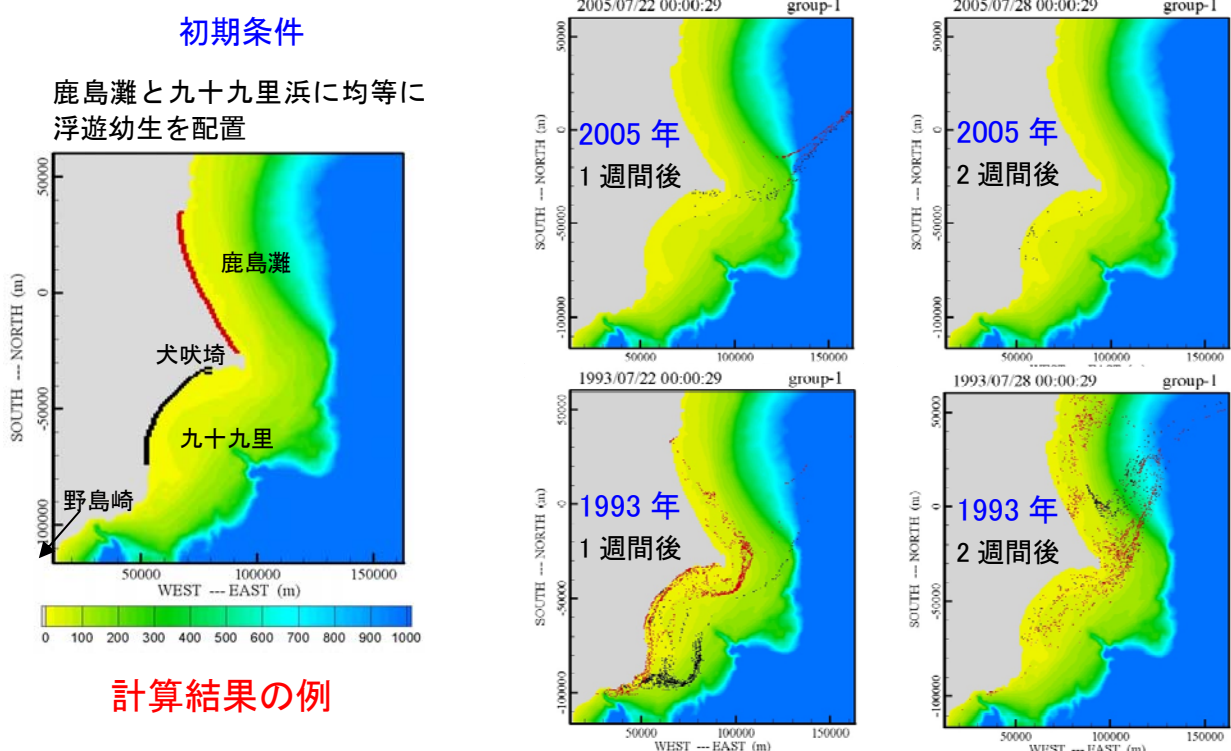
研究成果

計算結果から、以下の点が明らかになりました。①浮遊期間に黒潮が離岸しており、北または南の一方向に風が吹き続けない場合には、幼生は鹿島灘・九十九里側の両方に残りやすい(例:1993年)、②黒潮が野島崎に接岸している場合には九十九里側のみに残る、③黒潮が接岸している場合には沖に流出しやすい傾向がある(例:2005年)。

*ハマグリは生息水深が4m程度と浅いため、極浅海域での海浜流や海岸構造物の影響も考慮する必要があり、今後検討する予定です。

波及効果

浮遊幼生の移動分散が計算により予測可能となれば、たとえば産卵母貝の適正な配置などの立案に役立ちます。



(水産基盤グループ: 中山哲巖・八木宏・足立久美子)